MIT Technology Review

Published by KADOKAWA / ASCII

Vol. 85
2026.05

News&Trend

ディープシークV4、3つの注目ポイント

炭素除去業界に激震、
マイクロソフトが購入中止

Interview

勝山湧斗（テラワットテクノロジー）

新・陰謀論の時代
社会を蝕む「信念」の正体

INDEX

Vol. 85

2026.05

003 特集

新・陰謀論の時代
社会を蝕む「信念」の正体

004 変わらぬ「陰謀論」の構造史、テクノロジーは何を変えたのか

013 当事者になった陰謀論研究家、「信じてしまう」理由が分かった

020 「自分で調べる」患者が激増、コロナが変えた医療現場の葛藤

026 あの洪水は「作られた」、異常気象にまつわる陰謀論を検証

034 「陰謀論者の心は変えられる」実験で分かった論破AIの可能性

---

037 U35 イノベーターの軌跡 #37
勝山湧斗（テラワットテクノロジー）
「量産から逆算」、UCLAから産業界に転じた電池エンジニア

040 News&Trends
ディープシークV4が登場、AI業界に与えるインパクトは？
タブー化する「ワクチン」、次世代がん治療が改名された事情
炭素除去業界に激震、超大口のマイクロソフトが購入停止

●本PDFに収録した記事の情報は原則として、初出時の情報です。記事中の初出日をご確認ください。
●WebサイトのURLやソフトウェアのバージョン等は予告なく変更されている場合があります。
●本PDFは情報の提供のみを目的としています。本PDFを運用した結果について、著者およびMIT Technology Review Japan/株式会社角川アスキー総合研究所は一切の責任を負いません。
●本PDFに登場する会社名、商品名は該当する各社の商標または登録商標です。本PDFでは®マークおよびTMマークの表示を省略しています。

新・陰謀論の時代
社会を蝕む「信念」の正体

陰謀論がテクノロジーによって加速している。米国では、陰謀論者がホワイトハウス内に蔓延し、極端な思想を危険な政策に変えつつある。深い不信感とコロナ禍の隔離の長期化が重なり、ネット上のエコーチェンバーから抜け出すことはますます困難になり、生成AIは真実の構造そのものを変えつつある。この状況が科学技術にどう影響しているのか？ そして私たちはどう乗り越えるべきなのか？ 新たな陰謀論の時代を読み解き、その解決策を探る。

Matthieu Bourel

Story 1

新・陰謀論の時代　社会を蝕む「信念」の正体

変わらぬ「陰謀論」の構造史、テクノロジーは何を変えたのか

「陰謀論」は誤った呼び名かもしれない。研究者たちが指摘するように、それは反証可能な「理論」ではなく、反証不可能な「信念」だからだ。その構造は60年前にホフスタッターが解き明かしたものと本質的に変わっていない。ではなぜ今、これほど広がっているのか。

by Dorian Lynskey（作家）

そのタイミングは気味が悪かった。

1963年11月21日、リチャード・ホフスタッターは、オックスフォード大学で毎年恒例のハーバート・スペンサー記念講演をした。コロンビア大学の米国史教授だったホフスタッターは、社会心理学を用いて政治史を説明することを好んだ。それによって、左右両側の過激主義から自由主義をより効果的に守ろうとしたのだ。ホフスタッターの新たな講演には、「米国政治における偏執的スタイル」というタイトルが付けられていた。

「私はそれを、偏執的スタイルと呼んでいます」と、ホフスタッターは話し始めた。「理由は単純で、他のどんな言葉でも、私が念頭に置く熱狂的な誇張表現、疑い深さ、陰謀めいた空想といった性質を的確に想起させないからです」。

その講演からわずか24時間後、ジョン・F・ケネディ大統領がダラスで暗殺された。そのたった1つの衝撃的な事件と、この出来事を説明しようとするその後の試みが、ホフスタッターの講演の明らかな主題となっているものを表す用語を世に広めた。その用語は講演の原文には実際に出てこないが、「陰謀論（conspiracy theory）」である。

ホフスタッターの講演録は後に改訂され、陰謀論研究が数十年の歴史を経た現在もなお、最も重要な論文と見なされている。なぜなら、陰謀論支持者による政治の歴史的な継続性を、厳密かつ簡潔に説明しているためだ。「偏執的スタイルは、私たちの一般生活において古くから繰り返し現れる現象であり、不信感を伴う不満の動きと頻繁に結びつけられてきました」とホフスタッターは記し、この現象を米国初期の時代にまで遡って追跡している。各時代における陰謀論の急激な高まりは、新たなテクノロジーを通して新たな規模で拡散される新たなナラティブ（物語）として、驚くほど斬新に感じられるものの、そのすべてが類似したパターンに従っている。ホフスタッターがはっきりと示したように、名称は変わるかもしれないが、基本的なテンプレートは同じままなのだ。

ホフスタッターによる政治の心理学的解釈はこれまで物議を醸してきたが、陰謀論の隆盛を最もよく説明するのは、経済学などの外部環境ではなく、心理学である。その後の研究で、私たちには意図やパターンが存在しない場所にそれらの存在を見出す傾向があり、この傾向が、私たちが自らを重要な人物であるかのように感じるのに役立っていることが、実際に示されてきた。秘密の策略を見抜いて暴くことは、英雄的な気分になることであり、途方に暮れるほど混乱した人生をコントロールしているという幻想を得ることなのだ。

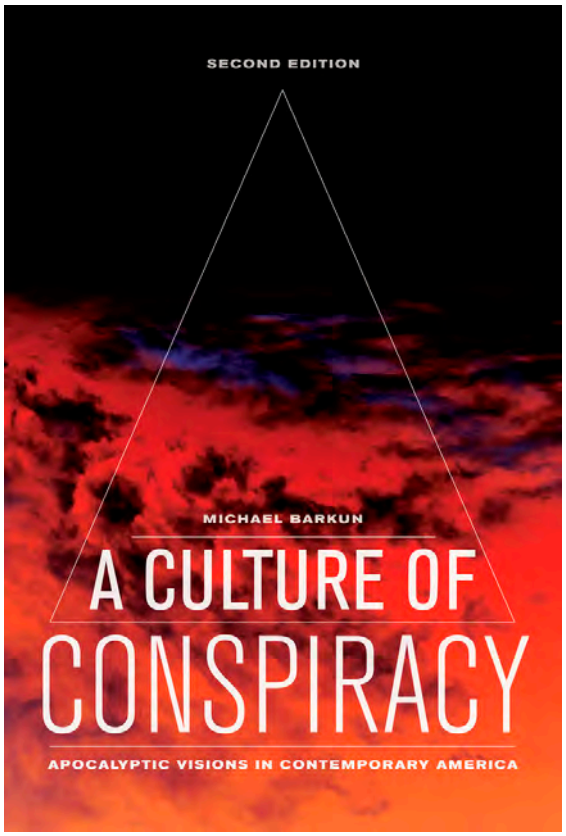
後知恵に基づく冷静な評価にさらされる多くの先駆的な理論と同様に、ホフスタッターの理論にも欠陥と盲点がある。ホフスタッターの主な誤りは、それまでの主流政治における偏執的スタイルの役割を軽視し、将来そのスタイルが広がる可能性を過小評価したことだった。

1963年当時、陰謀論はまだ周縁的な現象であった。それは、陰謀論が本質的に異常だったからではなく、その影響力が限定的であり、権力者たちにより社会的な非難の対象として位置づけられていたからである。今やそのどちらも当てはまらず、陰謀論は明らかに伝染性が高くなっている。ホフスタッターは、当然のことながら、縫い込まれるように私たちの生活と一体となった情報技術も、21世紀のひび割れたメディア生態系も想像できていなかった。この2つが、陰謀論的な思考がますます多くの人々に届き、姿を変え、カビのようにまん延することを可能にした

のだ。また、ホフスタッターは、陰謀論者が大統領に2度も選出され、2期目の政権スタッフとして仲間の偏執的スタイル支持者たちを置くことも、予測できなかった。

しかし、ホフスタッターの「偏執的スタイル」という概念は、世界を読み解く方法を説明するものでもあるため、今なお有用であり、その重要性が変わることはない。彼が説明したように、「偏執的スタイルの際立った特徴は、その主唱者たちが歴史のあちこちに陰謀や策略を見出していることではなく、『広範な』あるいは『巨大な』陰謀を歴史的な出来事の原動力と見なしていることです。歴史は陰謀であり、ほとんど超越的な力を持つ悪魔的な勢力によって引き起こされている。そして、それを打ち破るために必要と思われるものは、政治的な駆け引きという通常の方法ではなく、全面的な反対運動である（というのが彼らの考えです）」。

言うまでもなく、この神秘的に統一された歴史観は単に虚偽であるだけではなく、ありえないことである。それは、いかなるレベルでも合理性がない。では、なぜ、これほど長く実際に人々を魅了してきたのか。そしてなぜ、人々の支持が日々高まっているように見えるのだろうか。



『現代アメリカの陰謀論：黙示録・秘密結社・ユダヤ人・異星人（A Culture of Conspiracy）』
マイケル・バークン
UNIVERSITY OF CALIFORNIA PRESS, 2013

そもそも、陰謀論とは何か

「陰謀論」を広範に見られる現象として定義した初めての人物は、オーストリア系英国人の哲学者、カール・ポッパーである。ポッパーは1948年の講演『Towards a Rational Theory of Tradition（伝統の合理的理論に向けて）』において、その定義を示した。ポッパーは個別の陰謀に関する理論には言及していない。彼が関心を持っていたのは「社会の陰謀論」、つまり、出来事の成り行きを解釈する特定の方法であった。

ポッパーは後にそれを、「ある社会現象の説明は、その現象の発生に利害関係を持ち（時には最初に明らかにする必要がある隠された利害関係のこともある）、その実現を計画し密かに企む人々やグループを見つけ出すことにあるという考え方」と定義した。

恐怖や怒り、苦痛を呼び起こす予期せぬ大惨事を例にとってみよう。金融危機や壊滅的な火災、テロ攻撃、戦争などだ。従来の歴史家は、絡み合うさまざまな要因を解きほぐそうとするだろう。悪意はそのうちの1つの要因に過ぎず、偶然よりも重要性が低いかもしれない。

しかし陰謀論者は、そのような恐ろしい出来事の背後に悪意ある計算、つまり、完璧に構想・実行された恐ろしく複雑な策略のみを見出すだろう。意図こそがすべてである。ポッパーの見解は、ホフスタッターのものと一致する。「偏執者の歴史解釈は（中略）明らかに個人的です。決定的な出来事は歴史の流れの一部としてではなく、誰かの意志の結果であると見なされます」。

マイケル・バークンの2003年の著書『現代アメリカの陰謀論：黙示録・秘密結社・ユダヤ人・異星人（A Culture of Conspiracy）』（2004年、三交社刊）によれば、陰謀論支持者による出来事の解釈は3つの前提の上に成り立っている。その3つ

「陰謀論」は誤った呼称であり、私たちが実際に論じているものは陰謀信念であることがますます明らかになっている。

とは、あらゆることは相互に関連し合っている、あらゆることは予め計画されている、および、見た目どおりのことは何もない、という前提である。3番目の法則に従えば、広く受け入れられ、記録されている歴史は当然ながら疑わしく、いかに常軌を逸していようと別の説明の方が真実の可能性が高いということになる。ハンナ・アーレントが『全体主義の起源(The Origins of Totalitarianism)』(1972年、みすず書房刊)で記したように、20世紀の独裁政治における陰謀論の目的は「常に、公式の歴史が茶番であることを暴き、その中では目に見え、追跡可能で、既知の歴史的現実が、民衆を欺くために意図的に築かれた外面的な見せかけの姿に過ぎない、隠された影響力の領域を示すことであった」(もちろん、そうした独裁者たち自身が陰謀家であり、秘密の策略に対する自分たち自身の愛着を他者に投影していた)。

しかし、「陰謀論」は異なることを意味する場合があり、それを覚えておくことが重要である。バークンは陰謀論の3つの種類を、ロシアの人形のような入れ子状の構造で説明する。

「出来事陰謀論」は、1933年の帝国議会議事堂火災や新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の起源といった、特定の限定的な大惨事がテーマとなる。これらの理論は証明できないにもかかわらず、比較的信ぴょう性があるように聞こえる。

「体系的陰謀論」はそれよりもはるかに野心的であり、数多くの出来事を、密かな国際的策略の悪意ある結果として説明しようとする。それらは荒唐無稽ではあるが、少なくとも、イルミナティや世界経済フォーラムといった具体的な名前を持つ集団に固執する。

最後に「超陰謀論」は、歴史そのものが、ほとんど超自然的な力と悪意を持つ目に見えない勢力によって画策された陰謀であるという、ありえない空想である。Qアノンから派生した最も極端なグループは、そのような普遍的な陰謀を事実であると仮定する。それは、ほかならぬ世界全体を包括し、説明しようとする考えである。

この3つは、まったく異なるジャンルの物語を語っている。最初の陰謀論が探偵小説に似ているとすれば、他の2つは寓話に近い。しかし、ある種類の陰謀論が他の種類へと変容することもある。ケネディ暗殺をめぐる陰謀論を例にとろう。初期のアマチュア捜査員たちは、キューバ人やマフィアといった信ぴょう性のある暗殺者を軸に、比較的自己完結した出来事陰謀論を生み出した。

しかし、時間の経過と共に、出来事陰謀論は視野が狭いものに思え始めた。オリバー・ストーンの1991年の映画『JFK』が公開された頃までに、かつて人気だった筋書きは影を潜め、大統領暗殺は巨大で長期にわたる陰謀の単なる一部に過ぎないという、精緻な作り話に取って代わられていた。ストーンの主要な情報源の1つはジャーナリストのジム・マーズだったが、彼はその後、フリーメイソンやUFOに関する書籍を執筆した。

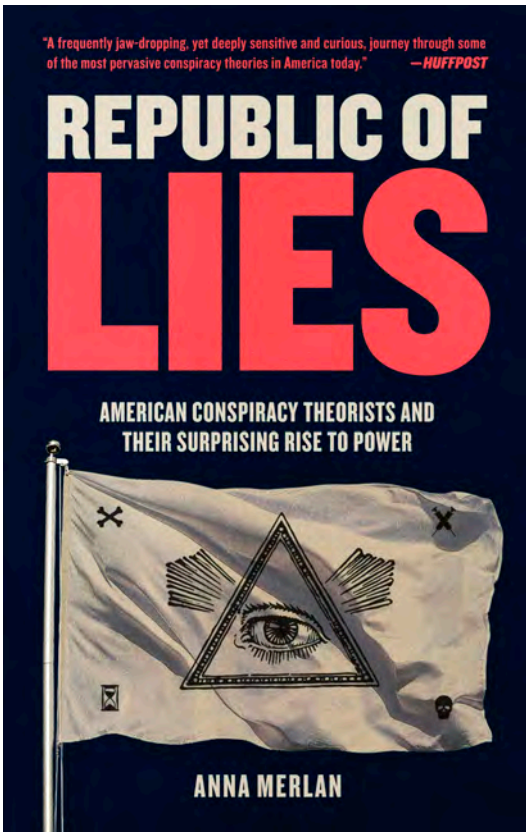
たった1つの出来事について、手をかけて調査した仮説にこだわる必要はない。1つの巨大で劇的な筋書きで、すべてを説明できるのだから。

あらゆることの理論

すべての体系的陰謀論あるいは超陰謀論において、世界は腐敗しており、不公平で、悪化している。ありえないほどの力を持った個人たちのエリート陰謀団が、純粋な悪意に突き動かされて人類の不幸の大半を引き起こしている。そういった悪人たちは、正義の少数派による隠された知識の暴露と暗号解読を通してのみ、正体が暴かれ、打倒される。この倫理観は、ナラティブが複雑であるのと同じくらい非常に単純である。つまり、善と悪の戦いなのだ。

何か気づいただろうか。これは民主主義政治の言語表現ではなく、神

話や宗教の言語表現である。実際、それは『ヨハネの黙示録』の基本的なメッセージだ。陰謀論者の思考は、終末論的なキリスト教の、必ずではないがしばしば世俗化された分派と見なすことができ、予言、符号、秘密が網のように絡まりあった魅力的なナラティブと、暴力的な解決の約束が伴う。歴史家のノーマン・コーンは、1957年の著書『千年王国の追求（The Pursuit of the Millennium）』（1978年、紀伊國屋書店刊）のために数グループの千年至福説信奉者教団を研究した後、それらに共通する特徴をいくつか列挙した。その中には、「自分自身が選ばれし者であり、完全に善良で、ひどい迫害を受けているが最終的な勝利が保証されているという誇大妄想的な考え方、敵対者に対する巨大で悪魔的な力の帰属、および人間的な経験の避けられない限界や不完全さを受け入れることの拒否」などが含まれている。



『Republic of Lies: American Conspiracy Theorists and Their Surprising Rise to Power（嘘の共和国：米国の陰謀論者たちと彼らの驚くべき権力掌握）』
アンナ・メルラン
METROPOLITAN PUBLISHERS, 2019

同様にポッパーも、社会の陰謀論を「宗教的迷信の世俗化による典型的な結果」と見なし、次のように付け加えた。「神々は見捨てられます。しかしその地位は、権力を持つ者たちや集団によって埋められます。そういう者たちの邪悪さが、私たちを苦しめているあらゆる悪の根源なのです」。

インターネット掲示板上の陰謀論からカルト的特徴を持つ運動へと変わったQアノンの変異が、陰謀論と終末論的宗教の間の近縁性を明確にしている。

このような思考法が、非人間的なスケープゴートを生み出すことを促進する。それは、陰謀論において最も古く、最も一貫して見られる特徴の1つである。中世以降、政治的・宗教的指導者たちは決まって対抗勢力を「反キリスト」呼ばわりした。十字軍の時代には、キリスト教徒たちが欧州のユダヤ人コミュニティを、イスラム教徒との共謀や井戸への毒投入といった虚偽の事実で告発し、斬り殺した。魔女狩りでは、病気から作物の不作まであらゆることを説明するとされていたいわゆる悪魔の陰謀に、無実の女性が何万人も巻き込まれた。「陰謀論は結局のところ、出来事の説明ではなく、むしろ責任の所在を明らかにしようとするための試みです」と、アンナ・メルランは2019年の著書『Republic of Lies（嘘の共和国）』（未邦訳）で述べている。

しかし、私たちが知っている体系的陰謀論、すなわち表面上は非宗教的な種類の陰謀論が、それから三世紀後に驚くべき速さで確立された。フランス革命に震え上がった一部の革命反対者たちは、このような大変動が単純な民衆の反乱であるとは受け入れられず、目に見えない邪悪な勢力のせいにする必要があった。そして、イルミナティに起因しているという結論に落ち着いた。イルミナティとは、フリーメイソンの儀式や階層構造に一部影響を受ける、啓蒙主義的知識人たちによるバイエルンの秘密結社である。

この団体は、アダム・ヴァイシャウプト（別名「ブラザー・スパルタカス」）という名前の若い法学教授によって創設された。実は、イルミ

Insider Online限定

eムックはMITテクノロジーレビュー［日本版］の
有料会員限定サービスです。
有料会員はすべてのページ、バックナンバーを
ダウンロードできます。

ご購読はこちら

https://www.technologyreview.jp/insider/pricing/

No part of this issue may be produced by any mechanical, photographic or electronic process, or in the form of a phonographic recording, nor may it be stored in a retrieval system, transmitted or otherwise copied for public or private use without written permission of KADOKAWA ASCII Research Laboratories, Inc.

本書のいかなる部分も、法令または利用規約に定めのある場合あるいは株式会社角川アスキー総合研究所の書面による許可がある場合を除いて、電子的、光学的、機械的処理によって、あるいは口述記録の形態によっても、製品にしたり、公衆向けか個人用かに関わらず送信したり複製したりすることはできません。